

27. 青森ねぶた祭

旅行会社 J T B のアンケートによるとわが国で一番人気のある祭は青森ねぶた祭だ。300万人が訪れる観光中心、いかなる寺社とも無関係な宗教色のない祭だと聞いていたので私の関心の対象ではなかった。

しかし、日本一観光客の多い祭を観ずして祭を語ることもまた偏屈だと思い、8月3日・4日に出かけた。

私は日本列島のほぼ中央、愛知県の生まれであるので青森県と言うとなかなか馴染みは薄いが、日本国民にとってその位置が即座に分かるのは北海道、沖縄に次いで青森県だというアンケートを観たことがある。一方、私は全国の祭を考える際、体験として知り尽くしているわが故郷の犬山祭を座標軸の原点に置き、外の祭を観、考え、理解し、学び、評価したいと考えている。

東北新幹線の終点で乗り換え10分、青森駅に降り立つとそこはねぶた祭一色の世界で

あった。駅前広場からいきなり津軽三味線の演奏が飛び込んできた。祭囃子の基本は笛・太鼓・鉦・鼓などである。三味線という楽器は少々複雑で他の祭囃子とは一線を画すが、津軽で聴く本場津軽三味線はまた格別迫力があり、一瞬にして地域の伝統的な芸能を動員して総合的に作られた祭であることを悟った。

ねぶた師の存在もこの地の特徴であろう。プロのねぶた師が10人以上いると聞き、祭が地場産業の裾野を広げていると知った。からくり人形の祭のメッカ中部地区ではプロのからくり人形師は2人しかいない。

祭に参加するハネト（跳人）と呼ばれる踊り子の動きはラッセ・ラッセの掛け声とともに誠に単純、誰にもできる。笛・太鼓・鉦などの祭囃子と相まって、集団の醸す熱狂は祭の大切な要素ではあるが、それは多かれ少なかれどこの祭にもある。が、夜闇に浮き上がる巨大で赤を基調にした鮮やかなねぶたがあってこそ彼らの興奮は引き出される。

ねぶたのテーマは神話世界や津軽の歴史物語はたまた三国志・水滸伝などを題材とした勇壮な影武者が描かれる。素材がユネスコ無形文化遺産の和紙であるところが重要だ。今年アメリカ映画スターウォーズのねぶたが作られたが引き回すことはなかった。この祭は氏神や産土神を祀る神社の例祭ではなく津軽藩を中心に、七夕の習慣と地域の伝統芸能などを入れて徐々に現在の形に整えてきたものであるが一定の伝統と規律を尊重した一件ではあると評価した。

わが国縄文最大の遺跡三内丸山は祭会場と指呼の間にある。「ねぶたは縄文の祭 京都五山の送り火は弥生の祭」梅原猛流の視点や、このねぶたをこよなく愛した棟方志功の宗教色の強い芸術の数々を思い出し、ねぶたの照明が電気であること、観光会社が商品化し過ぎることについてやや不満であるが、日本人の宗教観やかすかな縄文の遺伝子を感じたことで私の内での日本の祭基準はクリアされた。